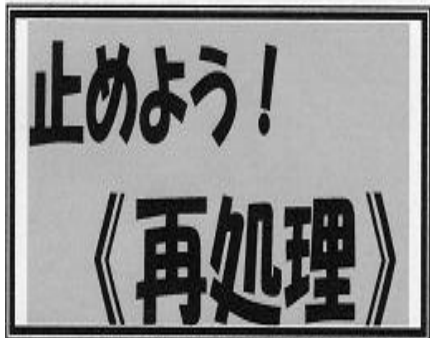


**三陸の海を放射能から守る
岩手の会**

郵便振替 02240-5-102650
ホームページ《再処理/岩手の環境》
http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm
《まった再処理分庫》
http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag



《天恵の海》

2013(平成25)年
6月19日
第128号
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX 019-623-1636

『チェルノブイリ被害の全貌』の著者

アレクセイ・V・ヤブロコフ博士の講演

チェルノブイリ事故の死者は100万人に及んだ



主催 日本科学者会議岩手支部、原発からの早期撤退を求める岩手県学識者の会
共催 岩手県保険医協会学術文化部 岩手県反核医師歯科医師の会 三陸の海を放射能から守る岩手の会
後援 岩手大学、岩手県生活共同組合連合会、岩手県消費者団体連絡協議会など7団体

『チェルノブイリ事故の被害の全貌・日本語版』
岩波書店刊・5250円(税込)。

世界保健機構報告書批判
博士は、まず、今回来日したのは、『チェルノブイリ被害の全貌』という博士らの著作の日本語版が発行されることになったからと切り出しました。
二〇〇六年国際原子力機関(IAEA)と世界保健機構(WHO)は「チェルノブイリ事故発生から七〇年間の死者は九〇〇〇人、病気になる人は二〇万人である」とする報告書を発表しました。これは、事故

五月一九日、岩手大学工学部テクノホールにおいて、ロシア科学アカデミー評議員で生物学者、アレクセイ・ヤブロコフ博士の講演会が開催されました。会場には岩手県内や青森、秋田などから約一三〇人が集まり、博士らが、チェルノブイリ事故以来膨大な資料収集を行い科学的考察を加え実証した、原発事故被害の全貌報告に聞き入りました。
博士は「環境に放出された放射性微粒子が体内に取り込まれてしまうと、細胞の生まれ変わる速度が遅い部位では、その物質を抱え込んだまま、周囲の組織に長く悪影響を与え続ける。ガンに限らず、循環器、内分泌、免疫、呼吸器、神経、遺伝など各系に障害をもたらす。原子力発電はもしかすると核兵器以上に人類にとって脅威である」と語りました。

**がんは原発事故の後遺症の
十〜十五%に過ぎない**

周辺の現実を観察してきた科学者にとってあまりに過小評価であり受け入れる事が出来ないものでした。そこで博士の友人のV・ネステレノ博士と相談し、四人の共著による本を著し、事故被害の真実を徹底的に明らかにしました。事故被害は、公式発表に比して桁違いに大きなものでした。

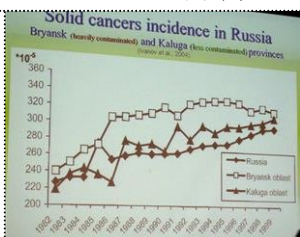
チェルノブイリは福島事故の鏡

博士は、チェルノブイリ事故で引き起こされた被害の実際は、福島事故によっても引き起こされるだろう、今後を予測する「鏡」となるだろうと語り、放射能汚染の被害の実態について、統計グラフなどを用いて説明しました。
何点かを述べると次のような内容です。

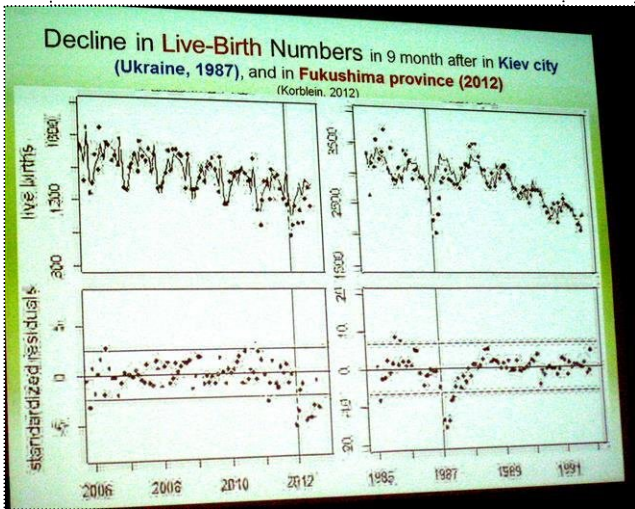
◆「ロシアにおける固形ガン発生数」はチェルノ

固形ガン発生数(ロシア)

1982~1990
□・チェルノブイリ周辺



事故9ヶ月後の出生数の減少



2012年↑

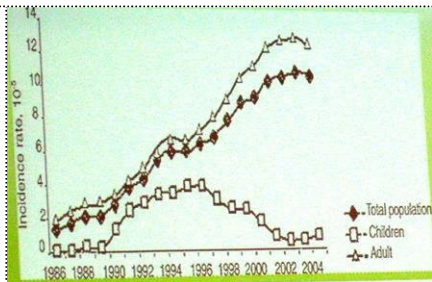
↑1987年

福島県

キエフ (ウクライナ)

甲状腺がん (ベラルーシ・ウクライナ)

1986~2004 □・子供



◆子供の甲状腺がんはウクライナ、ベラルーシで事故五年後の一九九

一年から急速に増え一九九六年に頂点に達した。福島においても同じような事態が懸念される。

◆子供が生きて生まれる「出生率」が事故九ヶ月後に急落した。これは、福島事故後にも既に見られる。

こういった原発事故による放射能汚染被害について博士は「乳がんの罹病率」や「事故被害防護活動従事者(リクビダートル)の家庭における流産率」、「先天的異常をもって生まれた子供の数」「ダウン症候群の数」「水晶体の混濁」、「乳

児死亡率の変化」などについても詳細な統計数字をあげて、全て事故後の急速な増加が見られたと語りました。

チェルノブイリ事故 三つの教訓

そして博士は、チェルノブイリ事故の教訓として次の三つを上げました。

- 1、「放射能の状況は安全だ」という当局の発表を信じてはいけない。
- 2、水、食料、大気といった放射能のモニタリングには市民の独立した機関が必要である。
- 3、体内に取り込んだしまった放射性核種の検査も市民の独立した機関が必要である。

質問・意見交換

以上の基調的な講演のあと、出席者からの質問と意見交換に多くの時間が割かれました。その主なものを上げます。

日本の市民がやらねばならないこと

◆男性市民から、「チェルノブイリ事故の過酷さはよくわかったが、福島事故は人災ではあるが、チェルノブイリほど酷くはなかったのでは

ないか？」という質問がありました。これに対して博士は、放出放射能はチェルノブイリよりやや少なかったかもしれないが、人口密度を考えると樂觀できない。ドイツの疫学者が「日本全体と福島県で幼児死亡率が増大している」という報告書を発表した。これはむしろ資料が得られ易い日本の研究者こそすぐにやらねばならないことである、と答えました。

医学的検査の重要性

◆二歳になる娘を持つ母親から「胎児被曝について心配である」という質問がなされました。博士は、該当事例の判断が出来る立場ではないが、胎内被曝のリスクの主なもの「免疫」と「ホルモン」に関してである。常に免疫力を高め、結婚適齢期には染色体検査や男性なら精子の検査を受けて欲しい。適正な検査を受けることによって、様々な医学的対策も効果的に行うことが出来る。また「小児甲状腺がん」についても、被曝の疑いのある全ての子供がこまめに定期的

にエコー検査を受けければ、早期に発見できる。早期ならば手術によらないホルモン療法もある、と語りました。

「年間1ミリシーベルト」は子供には危険

◆「年間1ミリシーベルトで安全ですか」という質問がありました。

博士は「シーベルト」は核種ごとの被ばくのダメージを計算で求めたもの。仮定によって変わる。特に内部被曝については食品ごとのベクレル数が基本だ。国際的基準の「年間1ミリシーベルト」は、大人ならば安全と言っても「子供なら危険」と思う。私は「年間0.1ミリシーベルト」なら良いと思う、と述べました。

福島で安全な生活を確保するために。

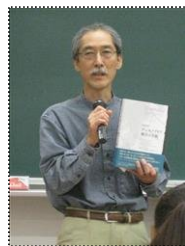
◆福島で被災し岩手に避難してきた家族から、福島は今どうあるべきか、質問がありました。

博士は福島で安全な生活をするにはかなり難しい。しかし、福島の放射能を封じ込め安全に生活するためには、全国上げての産業的経済的支援の体制が必要

ガン確定二人

福島県甲状腺検査

六月五日付け新聞各紙は、福島県健康管理調査で、原発事故時に一八歳以下であった子供三六万人のうちこれまで一七万人の甲状腺検査が行われ、その中で「ガン」と確定した人数が三人から九人増え合計二人となったと伝えていきます。さらに「ガンの疑い」が一五人あり、合わせて二七人となりました。二年目でこの人数ですから、今後小児甲状腺がんの大量発症が心配されます。二年過ぎてもエコー検査を受けていない残り一九万人の対象者が存在しており予防医療体制の遅れは看過出来ない深刻な事態です。



星川 淳 氏

講演のおしまいに「翻訳者チーム」の代表の星川淳氏から挨拶があり、「チェルノブイリ被害の全貌」の翻訳の苦心と日本語版の発行の意義の説明がありました。

だと力説しました。